

学びに向かう力を育てる授業の在り方

～外的リソースを活用した総合的な学習の時間とカリキュラム・デザイン～

矢出 大介

子どもが課題解決のために各教科・領域を横断的に学んでいくことで、学びに向かう力を育てることができると考えた。カリキュラムの中心に総合的な学習の時間を位置付け、外的リソースを活用していった。学びをとおり、子どもの自己肯定感が、自己有用感→自己使命感の順に高まっていくことを意識した単元を構想した。単元の流れとしては、環境について考え、自分たちが知らないうちに環境を汚していたり、様々な人々に支えられていたりしていることを知り、自分たちに何かできないかを考える。そこで、発展途上国の支援をしている人と出会い、一緒に支援していく。子どもたちが支援のために努力をしていくことで、周りの人たちが一緒に活動してくれることを実感していく。多くの人と一緒に活動したことでラオスに井戸を作ることができ、自分たちも社会の役にたっていると感じる。日々の生活においても、周りを見て自分たちにできることをしていこうとする気持ちが育っていった。

キーワード：キャリア教育、カリキュラム・デザイン、総合的な学習の時間、PDCA サイクル、外的リソース

1. はじめに

中央教育審議会答申（平成 28 年 12 月 21 日）では、カリキュラム・マネジメントを 3 つの側面に整理されたものが示された。（①各教科等の教育的に内容を相互の関係で捉え、学校の教育目標を踏まえた教科横断的な視点で、その目標の達成に必要な教育内容を組織的に配列していくこと。②教育内容の質の向上に向けて、子どもたちの姿や地域の現状等に関する調査や各種データに基づき、教育課程を編成し、実施し、評価して改善を図る一連の PDCA サイクルを確立すること。③教育内容と、教育活動に必要な人的・物的資源等を、地域等の外部の資源も含めて活用しながら効果的に組み合わせること。）

1.1 研究仮説

こういった状況の中、本校における研究である未来に生きて働く資質・能力の育成と絡めて、特に総合的な学習の時間を中心としたカリキュラム・デザインと外的リソースの活用が資質・能力の中でも特に学びに向かう力を育むのではないかと考えた。

2. 研究の目的・方法

2.1 目的

本研究の目的は、本校の子どもたちに必要である学びに向かう力を育むために、小学校 5 年生における総合的な学習の時間を中心としたカリキュラム・デザインと外的リソースの活用方法を探ることにある。

2.2 分析方法

和歌山大学教育学部附属小学校 5 年生 A 組 28 名を対象とした。子どもたちは、これまでも総合的な学習の時間などで、実社会の問題解決の学習を行ってきた。今回、外的リソースの活用を意識し、総合的な

学習の時間だけでなく、国語科、図工科、社会科、特別活動、道徳科と関連させて学ぶことで、学びに向かう力を育むことができたかを検証していくこととした。なお、子どもたちの振り返りの記述等の分析、アンケート結果等からその結果もしくは課題を抽出する。

3. 結果と考察

単元の前後で、学びに向かう力が育まれたかどうかをアンケート及びそれを元にした聞き取りによって以下のように抽出した。なお、附属小学校という特性を踏まえ、研究を目的とした教育機関であることは子どもたちも理解しているため、「学びに向かう力が育まれたかどうか」という話し合いが可能であったことを付しておく。

4. 単元の流れ

環境問題を中心にした総合的な学習の時間の単元を考えた（図 1）。

単元計画（全 30 時間）

第一次世界の日本の現状を知る	9 時間
生き物と環境の関わり	
森林問題と私たちの生活とのかかわり	
森林問題をめぐる人々のかかわり	
環境問題と私たちとのかかわり	
第二次日本と世界の水問題を知る	6 時間
環境アドバイザーに水問題を教えてもらう	
自分たちに何ができるかを考える	
SDGs ゲームで世界の問題を知ろう	
第三次ラオスのためにできることを考える	7 時間
尖戸先生のラオスへの思いを聞く	
ラオスにできることは何かを考える	
第四次自分たちの考えと成果を発信する	8 時間
自分たちの考えと成果を発信する	

図 1 総合的な学習の時間の単元計画

他教科の学びとつなげて学んでほしいと考えたため、ム・デザイン（図2）に記している。
この単元は2学期から開始した。詳しくはカリキュラ

5年A組 総合的な学習の時間を中心としたカリキュラム・デザイン

単元名：つなぐ笑顔 和歌山とラオス

カリキュラム・デザインの視点

教科・領域横断	P D C A サイクル	内外資源の活用
○		○

主として育みたい資質・能力

探究力			
課題設定	情報収集	整理・分析	まとめ・表現
課	情	整	表

【各教科・領域において探究のプロセスがつながることで、知識の活用・発揮が促され、探究のプロセスが充実していくイメージ】

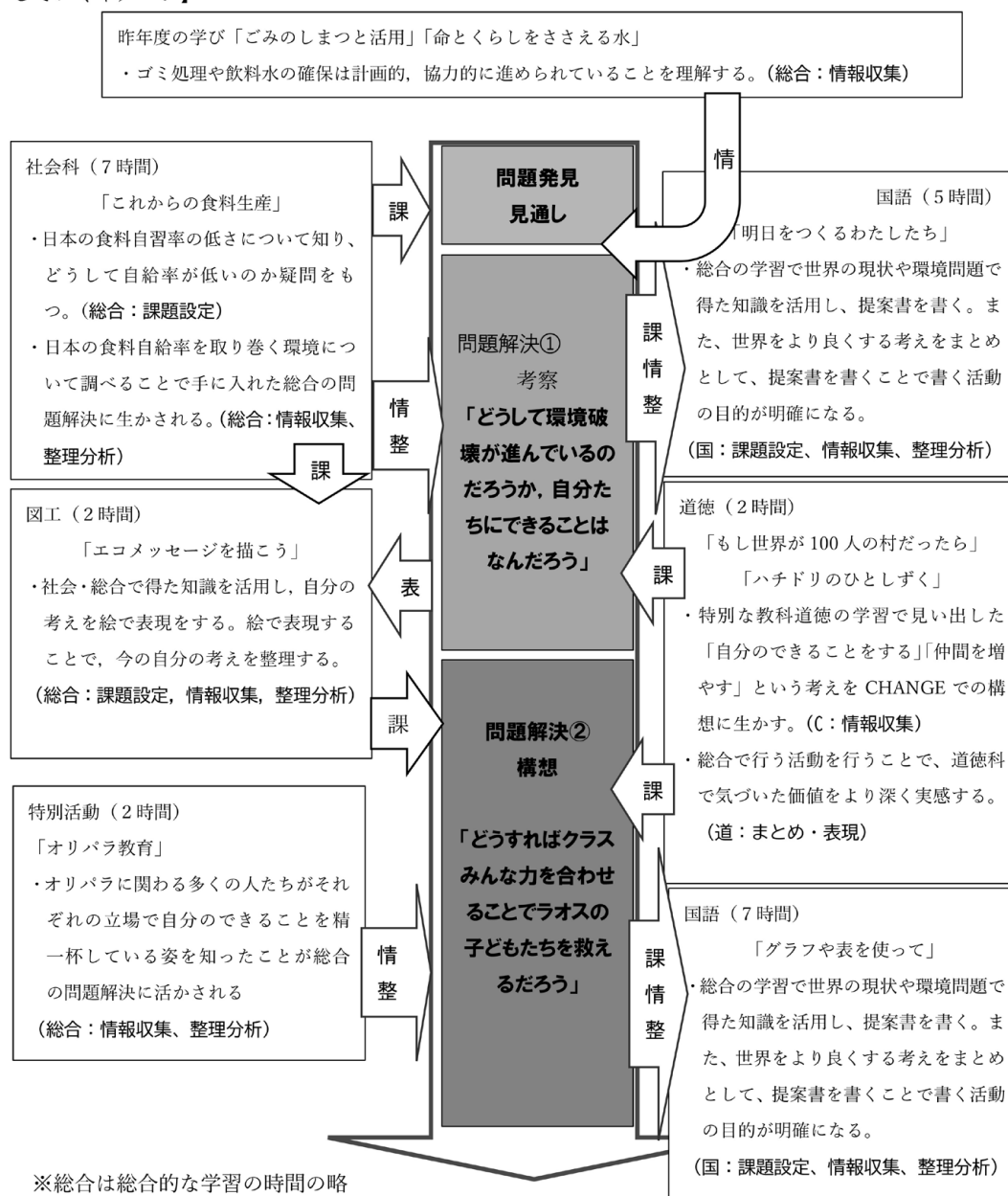


図2 カリキュラム・デザイン表

4・1 カリキュラム・デザイン

年間 70 時間と限られた総合的な学習の時間の時数を有効に活用するために、他教科とのつながりを意識した。

社会科「暖かい土地の暮らし」「これからの食料生産」、特別な教科道徳「もし世界が 100 人の村だったら」「ハチドリの一としずく」で学んだ。世界の現状などが総合的な学習の時間の問題解決に知識を補完するかたちで活用される。また、総合的な学習の時間で探究的に学んだことを表現・発信する段階で、国語科「明日をつくる私たち」図工科の「エコメッセージ絵画」とつなげることで、発信する力を高めていきたいと考えた。

カリキュラム・デザインする時には、昨年度の学びである「ごみのしまつと活用」「命をささえる水」を意識した。

4.2 外的リソースの活用の効果

小学5年生にとって環境問題を考えることは、容易なことではない。環境問題は複雑であり、専門的な知識が必要になる。子どもが環境問題に対する問題意識もつためには、環境に対する知識を得る必要がある。1 人の教師が知識を伝えていくことによって、単なる知識の伝達となり、子どもの学びは受け身になってしまうことが多い。環境問題の専門家に、ゲストティーチャーとして知識を伝達してもらうことで、単なる知識の伝達ではなくなる(図3)。子どもは、専門家への憧れの気持ちを持ち、自分たちも出会った専門家のように努力をしたいと思えるようになる。



図3 環境教育の専門家との出会い

そのためには、教師が年間のカリキュラム・デザインを作成した上で、専門家と育ってほしい子どもの姿を中心とした打ち合わせをする必要がある。

出会っていった大人との学びを価値付ける教室掲示(図4)が大切になる。これにより、クラス全員で学びや思いを共有したり、次の学びにつなげたりしていくことができる。



図4 出会った大人を価値づける教室掲示

まとめ・表現においては、これまで出会った大人に「感謝の気持ちを伝えたい」「自分たちの学びを伝えたい」など、主体的な学びを支えてくれる。相手意識がはっきりすることで、自分たちの学んだことを伝えるためには、必要な情報を整理・分析していく(図5)。



図5 情報を整理・分析

4.3 アンケート内容

単元の前でアンケートを行い、学びに向かう力の変化を考察した。

Q1 身の回りをよく観察していろんなことに気づくほうだ	思う あまり思わない 思わない
Q2 身の回りの問題に気づき、周りの人といっしょに解決できるほうだ	思う あまり思わない 思わない
Q3 新しいことを勉強したり、知らないことを初めて見たり、聞いたりするとき、「なぜだろう?」「どうしてそうなるんだろう?」と考えるほうだ	思う あまり思わない 思わない
Q4 身の回りに問題を見つけたとき、その解決方法を自分で発想し、それを大切にするほうだ	思う あまり思わない 思わない
Q5 新しいことを勉強したり、何かにチャレンジするとき、「もっと知りたい」と思うことについて人に聞いたり、自分で調べたりするほうだ	思う あまり思わない 思わない
Q6 新しいことを勉強したり、何かにチャレンジするとき、自分で目標をたて、目標をたっせいするためにどうしたらいいかを自分で考える方だ	思う あまり思わない 思わない
Q7 新しいことを勉強したり、何かにチャレンジするとき、失敗しても何度でもやり直したり、よりよいやり方を考えてあきらめなくてやろうとするほうだ	思う あまり思わない 思わない

学びに向かう力の高まりを検証するために必要な項目である Q4「身の回りに問題を見つけたとき、その解決方法を自分で発想し、それを大切にするほうだ。」Q5「新しいことを勉強したり、何かにチャレンジするとき、「もっと知りたい」と思うことについて人に聞いたり、自分で調べたりするほうだ。」において、単元前では思わない、あまり思わないと考える子どもが多かった。しかし、単元後のアンケートでは、思うと答える子どもが多かった。

初等中等教育分科会「**2. 新しい学習指導要領等が目指す姿**」(H29 年 9 月 14 日)では学びに向かう力、人間性等を以下のように記している。

・主体的に学習に取り組む態度も含めた学びに向かう力や、自己の感情や行動を統制する能力、自

らの思考のプロセス等を客観的に捉える力など、いわゆる「メタ認知」に関するもの。

・ 多様性を尊重する態度と互いのよさを生かして協働する力、持続可能な社会づくりに向けた態度、リーダーシップやチームワーク、感性、優しさや思いやりなど、人間性等に関するもの。

4. 4 考察

アンケート Q4「身の回りに問題を見つけたとき、その解決方法を自分で発想し、それを大切にしようだ。」Q5「新しいことを勉強したり、何かにチャレンジしたりするとき、もっと知りたい」のアンケート項目の答えは思わないと答えていた子どもが思うに変化した理由を考察した。

最も大きな理由は、子どもの自己効力感の高まりが関係していると考えます。

今回の単元では、前半に多くの大人と出会い、環境や発展途上国と日本の現状についての知識を得た。その知識を元にして、調べ学習などを行っていく中で、自分たちの解決すべき課題を見つけていった。

そして、その課題解決を自分たちが行っていった。この自分たちが行った活動により、改善されたり、自分たちの考えに賛同したりしてくれる人たちが増えたことを実感していった。

まず、子どもたちが行った活動は、学校給食の残食0プロジェクトだった。日本にはたくさんの食べ物を輸入しているにも関わらず約40%も廃棄している現実を知った。そして、自分の学校でも1日約15kgのご飯の残食があることを知った。そこで、まずは、自分たちのクラスの残食をなくす。その上で、学校全体の残食をなくすための活動することになった。

各クラスの残食チェックを行い、現状を知った(図6)。



図6 給食の残食チェック

そして、自分たちが学んで知った飢餓に苦しむ世界の現実と日本の廃棄の現実を中心にして、残食を減らしていったほしいと訴えた(図7)。



図7 残食を減らすよう呼びかける

実際に学校全体の残食が減っていった。それによって、調理員さんや栄養教諭にお礼を言ってもらえた。自分たちの行動に賛同してくれる友達がいる、感謝してくれる人がいることを実感していた。

このような活動を知った環境問題に取り組んでいる地域の人が、和歌山市の中心の商店街で5Aの子どもたちの考えを発信することを提案してくれた。子どもたちは、自分たちの努力が学校だけでなく、地域の人も分かってくれて、味方になってくれると感じていた。これにより、自分たちの環境問題やラオス支援に対する本気を伝え、今まで関わってくれた大人に自分たちの考えを分かってもらいたい、協力してもらいたいと考えるようになった。自分たちの考えや活動を伝えるために動画などにまとめていった。

その後、子どもたちは、環境問題を解決し、ラオスの子どもたちを支援したいと考えるようになっていった。

5. 成果と課題

5. 1 成果

発展途上国と日本の生活を比較しながら環境問題・貧困問題などについて、発展途上国で支援活動をした人や環境問題の解決に取り組んでいる専門家の方と出会っていきながら知識・理解を深めていくことができた。その上で、東南アジアで学校建設に取り組んでいる人と出会い、その人と一緒に東南アジアのために井戸を作るなどの支援を行っていかうと考えることができた。この活動をとおして、今まで知らなかったことを知り、その解決のために個人としてできること、クラスとしてできることを本気で取り組み、その成果として自分たちの考えに賛同してくれる仲間を増やしていく。そして、実際に自分たちの力で何かができることを実感することで自己効力感を高め、学びに向かう力を高めることができた。このような効果をカリキュラム・デザインと外的リソースを活用したことで限られた時間で成果を出すことができた。

5. 2 課題

環境問題は身近に考えることができたが、ラオス支援に関しては、子どもにとって身近に考えることが難しかった。1年間でラオスを支援することを目標とすることで、子どもが発展途上国を「支援してあげる」のような間違った考えになる可能性があると感じた。学校全体でカリキュラム・デザインをし、数年かけて発展途上国の文化なども理解しながら相手への尊敬の気持ちを大切にしながら、自分に何ができるかを考えていくことをもっと大切にした単元にする必要があった。

参考文献

田村学 (2019)「深い学び」を実現するカリキュラム・マネジメント 文溪堂